

Title	トウルシーダース作『ドーハーヴァリー』(2)
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2013, 12, p. 56-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50060
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

トウルシーダース作
『ドーハーヴァリー』(2)

長崎 広子 訳・注

101 シヴァ神にとって愛しくとも私（ラーマ）の敵で、シヴァ神の敵でありながら私の僕である者は、一劫中おそろしい地獄に住むことになる。

102 [俗世とは、そこから]離れていれば幸せで、まみれていれば不幸せなもので、それは生死の理である。ラーマが[この世に我々を]置いて下さった、そのままに暮らすべきである。悪行から離れるのがよろしい。

103 行いを伴わない言葉など無駄なだけだ。安息のないヨーガ行も無駄だ。トゥルシーダースは語る。ラーマの御足の愛がなければすべての方法は無駄である。

104 人々はみなヨーガに没頭するが、安息を得られないヨーガは無駄である。同様に、トゥルシーダースの考えでは、ラーマの愛のない規則は無駄である。

105 ああラーマ神よ、あなたの親切はすべての者にとって親切です。これが永遠の真理であれば、トゥルシーダースにとっても親切なのです。

106 トウルシーダースは語る。ラーマ神が尊んだ者は、善人であれ悪人であれ、善人となる。灯明が煤を頭上にいただければ、何度でもいただき続けるように、[ラーマ神は何度でも救って下さる]。

107 姿は色とりどりで、声は臆病で、へびを食糧とし、心は堅固である。トゥルシーダースの主はその羽根を[頭上に]抱く者（クリシュナ）となり、そのため、すべての人々は[主を]私のもの（モーラ=クジャク、私のもの）とよぶ。

108 かけたビタ錢ひとつ得られない者を誰が何のために必要とするだろうか？ 価値のない者を慈しむラーマ神はそんな[わたくしめ]トゥルシーを価値ある者として下さった。

109 トウルシーダースは語る。家々で食糧を恵んでもらった私の足をいまでは王が崇拝する。私はかつてはラーマ神を知らなかった

が、いまやラーマ神が守護者となって下さった。

110 トゥルシーダースは語る。ラーマ神の良い眼差しによって、弱者が強者となる。ヴァーリンとスグリーヴァが敵対した時にハヌマーンは何ができたのだろうか？¹

111 トゥルシーダースは語る。ラーマ神を思う以上にラーマ信者を心で思うべきである。[忠義を果たした]ハヌマーンが富める者となり、ラーマ王は[それに感謝し]負債者となられた。²

112 猿ハヌマーンはよい奉仕者としての義務を果たした。主[ラーマ]は心でそれを思い、感謝した。恩恵をもたらす者に恩恵を与えるラーマは、合掌して[ハヌマーンの前に]お立ちになった。

113 信者のために神ラーマは王の姿を纏われた。一般の人間として、最高に神聖な行いをなされた。

114 知と言葉と感官を超越し、始まりがなく、迷妄と意識と属性を越えた真の喜びの宝庫である神は、人として慈悲深い行いをなさる。

115 ヒラニヤクシャを兄[ヒラニヤカシプ]³とともに、また強力なマドゥとカイタバ⁴を倒した慈悲の海である神は[ラーマとして]

¹ 主君スグリーヴァがヴァーリンと敵対していた時に、ハヌマーンは何もせず逃げ回っていたが、ラーマと出会ったことによって、スグリーヴァは救われ、その後ハヌマーンが大活躍したことを指している。

² ラーマは、自らの信者ハヌマーンの奉仕に対して神の権化や人間や賢者の中にもハヌマーンに並ぶものはないと称賛し、大いに感謝している。また、その功績に対して自らは負債者であり、それに報いることは到底できないと語る[Rāmacaritamānasa 5.31]。この文脈では、ラーマ自身をも超える信者（バクト）をラーマ以上に重んじよという意味になる。

³ ヒラニヤクシャとヒラニヤカシプは、ヴィシュヌの化身ヴァラーハとナラシンハに倒された双子の悪魔。

⁴ マドゥとカイタバは、ブラフマーを困らせた時に、ヴィシュヌによ

降臨された。

116 純粹で、真の喜びに満ちた根（喜びを与えるもの）であり、太陽族の御旗である[ラーマは、]人として[ふさわしい]行いをなされた。それは生死流転の海にかかる橋である。

117 ラグ族の主（ラーマ）はすばらしい子供の衣装と装身具を身に纏い、その手足は埃にまみれ、少年たちや弟たち全員とともに子供の遊びに興じる。

118 毎日アヨーディヤーでは祝いの歌が鳴り響き、日々新たな幸福と喜びが祝われる。ラグ族の主（ラーマ）の子供の遊びを見て、父も母も人々も喜んだ。

119 コーサラ国の守護者である少年たちは、膝と手ではいはいし、すばらしい遊戯をし、吉兆と繁栄の首飾りのように、王の中庭を美しく飾る。

120 ラグ族の主（ラーマ）の名は愛らしい。遊びも愛らしい。姿も愛らしい。衣装も愛らしい、装身具も愛らしい。愛らしい弟と子供たちともに。

121 ラーマ、バラタ、ラクシュマナ、シャトルグナというめでたく愛らしい名をもつダシャラタ王のすべての息子たちを念想すれば、あらゆる心の願いは叶うだろう。

122 コーサラ国の守護者の息子は、家来を守り、親切である。トゥルシーダースの心の湖⁵に吉兆の美しい白鳥として住んでおられる。

って倒された悪魔。

⁵ 心の湖 *mana mānasa* の *mānasa* とは、チベットのマーナサ湖であるが、白鳥が住む美しく聖なる湖として、作品の題名『ラームチャリットマーナス（ラーマ神の聖なる行いの湖）』のように、トゥルシーダースが好んで用いる比喻表現である。

123 [ラーマ神は]信者、大地、バラモン、牝牛、神のために親切で、人間の姿となって、遊戯を行なわれる。それを聞けば、この世の束縛は消滅する。

124 神、大地、牝牛、バラモンのために、自らの意思で神は降臨された。そこに徳を備えた信者がすべての盲迷を捨てて、付き従う。

125 最高の喜びであり、慈悲の住処であり、心を希望で満たす方。聖なるラーマ神よ、私に不滅の信愛^{バクティ}をお与えください。

126 たとえ水をかきまぜてギー（精製バター）ができ、たとえ砂から[食用]油ができたとしても、確かな原則は、ハリを称賛しなければ、この世を渡ることはできないということだ。

127 ハリの幻影によってなされた功罪は、ハリを称賛せずに消えることはない。こう心の中で考えて、すべての欲望を捨て、ラーマを称えるべきである。

128 意識を無意識とし、無意識を意識あるものとする。そのような力のあるラグ族の主を称える魂は幸運である。

129 ラグ族の英雄（ラーマ）の威光によって海に石が浮かんだ⁶。そのラーマを捨てて、他の神のもとに行き称賛する者は愚かである。

130 心よ、どうしてラーマ神を称賛しないのか！彼の時代は弓であり、わずかな時間、瞬間、微細な時、ユガ、年、劫はその鋭い矢であるのに。

131 悲しみの住処である欲望を捨て、ラーマを称えないかぎり、魂に安寧はなく、夢にも心に安息を得ることはない。

132 真実^{サト}の集会^{サンガ}なしのハリの講話はない。それなしに盲迷は消えない。盲迷が消えることなしに、ラーマの御足に強い愛着は生まれな

⁶ ラーヴァナ征伐のために、ラーマの軍勢がランカー島まで石を海に浮かばせて橋をかけた逸話。

い。

133 信頼のない信愛はない。その信愛なしにラーマが慈悲をかけることはない。ラーマの慈悲なしに夢にも魂は安息を得ることはない。

134 こう考えて、落ち着いた考えを持つ者(ガルダ)よ、すべての悪い論理と疑念を捨てなさい。憐れみ深く、美しく、幸福を与える方であるラグ族の英雄ラーマを讃えなさい。

135 幸福の蔵、慈悲の館である神は愛の支配者である。執着、誇り、高慢を捨てて、常にシーターの夫（ラーマ）を讃えなさい。

136 けがれの無い心をもつサントは、ヴェーダやプラーナを吟味して語る。シーターの夫（ラーマ）が慈悲をかけて下されば、この世の悲しみから解放される。

137 ヴェーダとプラーナは語る。師なしに知識が得られるだろうか。遁世せずに知識が得られるだろうか。ハリへの信愛なしに、幸福が得られるだろうか。

138 ラーマチャンドラを讃えずに解脱の境地を望む者は、たとえ知者でも角と尾のない獣のようなものである。

139 財産、家、幸福、友、父母、兄弟など燃えてしまえばいい！ラーマの御足の前で何千もの奉仕をしないのならば。

140 トゥルシーダースは語る。正しい聖者と師に奉仕し、ラーマへの信愛が不動である教を学んで理解しなさい。子供のころに身に付けた泳ぎは忘れることはないのだから。

141 トゥルシーダースは語る。すべての者はラーマの[信者]といわれ、すべての者がラーマを期待する。トゥルシーダースよ、ラーマ神が自らの[信者]と認める者を讃えよ。

142 ラーマに愛情を抱く姿を高貴な人々は尊敬する。愛情ゆえに、ルドラの姿を捨てて、ハヌマーンは猿になったのだ。

143 ラーマの奉仕を最上のものと知り、なすべきことを推察し理解しなさい。祖先（マハーデーヴァ神）が奉仕者（ジャーンバヴァン）⁷になり、シヴァ神がハヌマーンになったのだから。

144 トゥルシーダースは語る。悪人がラーマの奉仕者に悪意をもって咎めるのは、大鷹の子にウズラが目をむくようなものである。

145 ラーヴァナの敵であるラーマの僕に臆病者は悪事を働く。カラ、ドゥーシャナ、マーリーチャのように、卑しい者はすぐさま滅びる⁸。

146 善と罪、名誉と不名誉の将来の担い手はあふれている。トゥルシーダースは語る。[ラーマの]僕の災厄は、ラーマが取り除いて下さるだろう。

147 子供が蛇と遊んだり、火に手を突っ込めば、両親が子供を助けるように、父母であるラーマとシーターはトゥルシーダースを守って下さる。

148 トゥルシーダースは語る。金貸しにとっては昼が好ましく、泥棒にとっては夜が好ましい。ラーマの命令を守る者には、昼も夜も好ましい。

149 トゥルシーダースは、ラグ族の王（ラーマ）は慈悲の海である、と聞いて理解し納得した。この世で、（金持ちのための）宝石と金を高価なものとし、（すべての者のための）水と穀物を安価にして下さったのだから。

150 愛しい人[への執着]を捨てて、[神への]奉仕と美德と愛を意の

⁷ ラーマ軍で活躍する熊と解釈される。

⁸ カラ、ドゥーシャナ、マーリーチャはラーマに倒されたラーヴァナの家来。

ままにしないで。トゥルシーダースは語る。すべてはラーマ[の思し召し]によって、出会いと別れにおいて喜びを与えるものとなるのだから。

151 心は四つ（法、財、愛欲、解脱）を欲するが、それらは到達できないもので、四粒のチャナ豆を得られるだけだ。四つ[の目的を欲する気持ち]を捨てて、四つ[の目的]を与えて下さる方を[内と外の]四つの目で見て望みなさい。

152 真っ直ぐな心、正直な言葉、すべての正しい行い。トゥルシーダースは語る。ラーマの愛を生み出すすべての方法は真っ直ぐである。

153 トウルシーダースは語る。きれいな服を着て、甘い言葉を語っても、心がきつくて、行いが卑しく享楽という水に住む魚になった者が、ラーマを獲得することはない。

154 言葉と着物で輝く者は、最後に落ちぶれる。トゥルシーダースは語る。心で輝く者はラーマによっていつまでも輝き続ける。

155 トウルシーダースは語る。卑しい者よ、ラーマの命を受けて、たとえ死がお前を連れ去ろうとも、お前は幸せ者である。さもなければ、お前はずっと不幸なのだから。

156 ジャーティが低く、卑しい土地に生まれたのに、そのような女（シャブリー）⁹を[ラーマは]救済された。愚かな心よ！そのような主を忘れてお前は幸福を望むのか。

157 弟の妻に恋慕したとヴァーリンに語り、言い返さないようにされた¹⁰。トゥルシーダースは語る。（しかし）主はスグリーヴァの

⁹シャブリーは、篤い信愛によって、ラーマに会うことができた部族民の女性。自ら味わって甘かった果物を差し出し、それをラーマが臆することなく食べたというエピソードで知られる。

¹⁰ラーマに倒された猿のヴァーリンが死に際になぜ自分が倒されなければならないのかを問うと、ラーマは弟の妻に恋した罰だと答えた。

悪事には全く目を向けられなかった。

158 力持ちで、[軍隊等の]力を有するヴァーリンを倒して、猿の王（スグリーヴァ）を友とした。トゥルシーダースは語る。慈悲深いラーマのすばらしさは、貧しい者をお助けになることである。

159 ヴィビーシャナは何を土産に[ラーマに]会っただろうか。ヴァーリンはどんな悪事を働いたのか？トゥルシーダースは語る。主は庇護を求める者をいつも守って来られた。

160 トゥルシーダースは語る。コーサラ国の守護者（ラーマ）以上に救いを求めに来た者を守ってくださる方が他にいるだろうか。ヴィビーシャナが兄に対する恐怖から[逃げてラーマを]讃えると、[ラーマは彼の]貧窮と死[の恐怖]を打ちのめされた。

161 [自らの]意思はダイヤモンドよりも固く、[信者に対しては]花よりも柔らかい。ガルダよ、ラーマの意思を誰が理解できようか。

162 樹皮が着物で、果実が食事で、草が寝台で、愛するのは木だけであった時に、[ヴィビーシャナに]ランカーをお与えになった。これがラーマのなさり方なのである。

163 十の頭を差し出したことで、ラーヴァナにシヴァ神が授けられた財産と同じ富（ランカー島）を、ラグ族の主（ラーマ）は恥じらいながらヴィビーシャナに授けられた。

164 トゥルシーダースは語る。ラグ族の支配者ラーマはゆるぎない王国をヴィビーシャナに授けられた。今でも自らの集団とともに[ヴィビーシャナは]ランカー島におられる。

165 ヴィビーシャナは何を土産に[ラーマに]会ったか。ラグ族の主は[彼に]何をお与えになったか。トゥルシーダースは語る。このことを知らずして愚かな者は後悔する。

166 [ヴィビーシャナは]敵の弟で、卑しい羅刹で、悪名に満ちていたが、ラーマは見捨てられなかった。トゥルシーダースは語る。[し

かし]偽りの罪で疑いを抱いて、主はシーターをお捨てになった。

167 カイラーサ山を[手で]測った者（ラーヴァナ）の宮廷で、[ア
ンガダ¹¹]は]困難な誓いをたてた。トゥルシーダースは語る。それは
主の威光というべきか、奉仕者の信念というべきなか。

168 トゥルシーダースは語る。[ドラウパディーはカウラヴァの]
集会と廷臣を見て、サリーを押さえ、[神を呼ぶために]もう片手を
挙げた。ヤーダヴァ族の主（クリシュナ）は[ドラウパディーのため
に]着物の姿となって、第 11 番目の権化となられた。

169 トゥルシーダースは語る。王国の宮廷でドラウパディーは 3
回「助けて」と叫んだ。一回目で着物が伸び、二回目で[クリシュナ
神はどうしたものかと]あわて、[三回目で]震えながら自らのなすべ
き事（カウラヴァ征伐）をしようと思われた¹²。

170 幸福な人生を誰もが望むが、幸福な人生は神の手のうちにあ
る。トゥルシーダースは語る。[その手のなかでは]与える者も乞食
も、愚かで主人を持たない者に見える。

171 吝嗇家は与え、落ちている財を拾い、策を弄せずとも成就す
る。シーターの夫（ラーマ）の前で[その恩恵を]理解しなければな
らない。なされたことの結果は必ず吉兆となるのだから。

172 ダンダカの森を神聖にする方（ラーマ）のハスの御足のおか
げで、荒地に芽が生え、悪人が輪廻の海を渡り、哀れな者が王にな
る。

173 ラーマ、ラクシュマナ、シーターが情け深く見ると、そこで

¹¹ ヴァーリンの息子で、ラーマの信者となり、シーター捜索で活躍
した猿の忠臣。

¹² マハーバーラタの逸話。カウラヴァとパーンダヴァ間の賭博で取
られたドラウパディーは皆の前でサリーを剥がされそうになるが、ク
リシュナを念じたことによって、サリーが伸び、決してサリーが脱げ
ることはなかった。

は美しい木に季節外れの実がなり、岩から水が勢いよく流れだす。

174 岩が美しい女性（アハルヤー）¹³になり、[海に]山が浮かび、死者が生き返ったことを世間は知っている。ラーマの恩恵で吉兆とすべての安寧が得られる。

175 岩（にかえられたアハルヤー）を呪縛から解放した[ラーマの]御足を念想しなさい。トゥルシーダースは語る。思い患うなかれ。災厄は消えて、心の願いは叶うだろう。

176 トゥルシーダースは語る。死んだ熊と猿、アヨーディヤーのバラモンの息子を生き返らせ、風神の子（ハヌマーン）を忠臣とする、その方（ラーマ）を念想しなさい。

177 トゥルシーダースは語る。時代、業、徳、罪、この世の生類はあなたの手のうちにあります。ラグ族の主、シーターの夫（ラーマ）よ、私があなただのもの（信者）であることを知ってください。

178 トゥルシーダースは語る。老体は病のかたまりで、悪人とも付き合いがあります。ラーマよ、憐れんで私を救ってください。この哀れな者は救われるに値します。

179 ラグ族の英雄よ！私のように哀れな者はいません。あなたのように哀れな者を救済する方はいません。こう考えて、ラグ族の宝（ラーマ）よ、輪廻の苦しい恐怖を取り除いてください。

180 輪廻という蛇がトゥルシーダースというマンガースを噛んで、すべての知識を奪った。[しかし聖地]チトラクータ¹⁴は薬草である。

¹³ ガウタマ仙の妻アハルヤーは岩に変えられていたが、ラーマが足で触れたことによって、その呪いから解放された。本編の 174、175、189 が同一の逸話に基づいている。

¹⁴ ラーマが森に追放された時に暮らした聖地。トゥルシーダースも実際にそこに暮らし、『ラームチャリットマーナス』を執筆したという。詳しくは拙稿に記している。「ラーマ信仰の聖地チットラクート」、『説話・伝承学』, 9, pp. 133-150, 2001 年、「チットラクートの事跡と伝承」, 『説話伝承文化研究』II, pp. 3-19, 2001 年。

それを見れば意識が戻る。

181 シーターの夫（ラーマ）が主人で、トゥルシーダースはその奉仕者であると、私も言うし、皆も言う。ラーマはこの愚弄に耐えてくださっている。

182 ラーマの王国では、男も女も皆ダルマに没頭し、輝いている。執着、怒り、罪、悲しみがなく、四つの目的（法、財、愛欲、解脱）が得られる。

183 ラーマの王国では、満足と喜びがあり、家と森はあらゆる幸せを与えてくれる。木は如意樹で、大地は願いを叶える牝牛で、望んだ享樂と贅沢が手に入る。

184 トゥルシーダースは語る。ラーマの王国では、農夫、労働者、商人、召使、職人、（その他の）美しい仕事が、如意樹のように、すべてすばらしい実を付ける。

185 ラーマの王国では、棒は出家者の手にあり¹⁵、差別は踊り子の踊りの世界にしかない。「勝て」は心に打ち勝てとしか聞かれない。

186 トゥルシーダースは語る。ラーマの王国では慈しみのならわしは極みまで達している。[誰かが]怒っても、叱られることなく[逆に]心配される。仕事は頼まなくてもしてくれる。

187 鏡でラーマは[自らの]顔を見て、トゥルシーダースのような悪い奉仕者には怒っているように見えると思い、美德に数えられる[弧を描く]眉を責められる。

188 賢者が語った千の名の中で、「トゥルシーを愛する方」という（自らの）名を聞き、卓越したダルマを持てるラーマは、シーターの方を見て笑い、（妻以外の者を愛しているということに）心の中で恥じ入られた。

¹⁵ 棒の原文は *daṇḍa* で、刑罰と棒の意味があるため、ラーマの王国では刑罰はなく、棒が苦行者の手にあるのみという掛詞になっている。

189 ガウタマ仙の妻（アハルヤー）の解脱を思い出し、シーターは手で[ラーマの]御足には触れない¹⁶。ラグ族の宝（ラーマ）は[夫に対するシーターの]世俗を越えた愛情を知って、心の中で微笑まれた。

190 トウルシーダースは語る。月の出た秋の夜は星がまたたき美しい。あたかもラーマの高名という子供の手に真珠の飾りが輝いているようだ。

191 ラグ族の主の誉れという美女をどうして語ることができようか。中秋の名月でさえ、彼女のあごの綺麗なほくろにすぎない。

192 主[ラーマ]の徳の山は、ラーマの誉れという美女の装身具と服であり、ひときわ美しい。トウルシーダースの勤めは、[それを飾る]髪である。

193 ラーマの行いは、月光のように、皆に喜びを与える。善人というスイレンと心というチャコール鳥には、特に有益で、大きな恩恵がある。

194 ラグ族の英雄の誉れは善人に涼しさを与え、悪人を熱く苦しめる。トウルシーダースは語る。あたかも月夜がチャコール鳥の群れにとって涼しく、カモには熱いように。

195 トウルシーダースは語る。ラーマの講話はマンダーキニー川で、美しい心は[聖地]チトラクターである。美しい愛は森で、シーター妃とラーマ神が散歩なさる。

196 黒い牝牛のミルクはとても清潔で滋養があつて、皆が飲むように、善人は田舎のことば¹⁷でも、シーターとラーマの名声を歌い

¹⁶ 岩に変えられたアハルヤーにラーマの足が触れたことで、彼女が昇天したことから、まだ死にたくない思いで、シーターは夫の足に手で触れるという妻がする丁寧な挨拶をすることをためらっている。

¹⁷ 田舎のことばとは、ここでは古典サンスクリットと対象させて、

聞くのである。

197 すばらしい詩人たちはシヴァとヴィシュヌの名声を神の言葉（サンスクリット）と人間の言葉で語る。土鍋であろうと金でできた容器であろうと、[どちらで]調理しても良い穀物はおいしいように。

198 トウルシーダースは語る。[ラーマが]瞳に全世界を置かれたことを、人々は見えて知っている。ラーマの偉大さを誰が理解することができようか。

199 ラーマよ、あなたのお姿は言葉で語れず、知覚できない。ヴェーダ聖典で「これでもなく、あれでもない」といつも言われるように、不可知で、語れず、限りない。

200 幻力、個我、特質、徳、時代、業、偉大さなど、すべては神という数から増える。神という数がなければ、無意味である。

訳者解説

本編は、トウルシーダース (1532?-1623) 作『ドーハーヴァリー』の101 から 200 までの翻訳である。

トウルシーダースはヒンディー文学史上高く評価されるバクティ詩人であるが、彼自身について多くは知られていない。しかし、本編にはトウルシーダースが自身について語った詩節が含まれている点が注目される。たとえば、108 と 109 であるが、乞食をしていた当時のことを語っており、星のめぐりが悪いために家族に災いをもたらすとして家を出されたこと (*Kavitāvalī* 6.73, 7.57, *Vinaya Patrikā* 275.1-3) が背景にあるとみられる。非常に苦労した末に、ラーマ神との出会いをとおして、王が足下に額づくほどの名声を獲得したことが描かれている。トウルシーダースと同時代のナーバーダースが

トウルシーダースが自らの用いたヒンディー語のブラジ・バーシャーやアワディー方言を指している。

1600年に『信徒列伝 *Bhaktamāla*』の中でトゥルシーダースをヴァールミーキの化身と記していることやこの詩節から、彼が存命中にすでに高い評価を得ていたことが推察できる。

また、トゥルシーダースの著作である『ラームチャリットマーナス』の評判を妬む聖都ベナレスのバラモンたちはラーマ物語がサンスクリットではなく、ヒンディー語のアワディー方言で語られたことを非難してトゥルシーダースを迫害したという伝説があるが、その根拠になる詩節が196と197である。「善人は田舎のことばでも、シーターとラーマの名声を歌い聞く」として、自らの言葉を田舎のことばと卑下しているが、「すばらしい詩人たちはシヴァとヴィシュヌの名声を神の言葉（サンスクリット）と人間の言葉で語る。土鍋であろうと金でできた容器であろうと、[どちらで]調理しても良い穀物はおいしいように」197と、神のバクティを語るうえで、使用言語は問題にならないとしている。ちなみに、トゥルシーダースは『ラームチャリットマーナス』の中で、各巻の冒頭と巻末の祝祷および人間から神に語りかける部分ではサンスクリットを用い、それ以外ではアワディー方言を用いて言語を使い分けており、彼自身はサンスクリットも十分に扱える知識を持っていたことが伺える。しかし、民衆の用いるアワディー方言を主たる言語として選択し、ラーマの聖なる行いを著したことが、保守的なベナレスのバラモンたちの反発を招き、それは聖者伝文学や今日の彼の伝記でも記述されている。トゥルシーダースの功績は、平明な言語を用いて聖典を民衆に届けた点にあるが、この詩節の「すばらしい詩人たち」という言葉は、自らがアワディー方言とサンスクリットの両方を操るすばらしい詩人のひとりであることを自負してのもの、言い換えれば、バラモンたちの批判に対する反論と解釈できる。

なお、『ラームチャリットマーナス』(5.59.6)の「太鼓、田舎者、シュードラ、家畜、女はみな打つものである *dhola gavāra sudra pasu nārī sakala tāranā ke adhikārī*」の一節から、トゥルシーダースは低カーストと女性を蔑視していたと批判されることが多いが、部族民の女性シャブリーを描く本編の156では「ジャーティが低く、卑しい土地に生まれたのに、そのような女（シャブリー）を[ラーマは]救済された」とある。シャブリーが果実を自ら食べて、味の良いものだけを差し出し、それをラーマが食べたという逸話である。インドでは食べかけたものは食べ残しとして忌み嫌われるため、共にいた弟ラクシュマナは不愉快な様子を見せるが、ラーマは臆するこ

となく食べたことを極めて高德だとしているのである。つまり、低カーストでしかも女性であれば本来救いの対象ではないはずだが、慈悲深いラーマはすべての者を分け隔てなく救済することが強調されている。トゥルシーダースが差別意識を持っていなかったとまでは言いきれないが、当時の低カーストと女性に対する一般的な扱いが伺い知れる一節である。

これら以外に、ラーマの慈悲に関連して「この世で（金持ちのための）宝石と金を高価なものとし、水と穀物を安価にして下さった」149 と、自らの経済観を述べている点も興味深い。質素であっても穀物と水だけあれば暮らすことができるのはラーマのおかげと感謝しながら、高級品を欲しがる者は好きにすればよいと言わんばかりに突き放している。ラーマと異なり、自らは金持ちに冷淡で貧しい者に共感していると言っているようで、ここにトゥルシーダースの考えの一端が垣間見られる。

使用テキストおよび注釈

Śukla, Rāmacandra., ed., 1973-77, *Tulasī Granthāvalī*, khaṇḍa 2, Vārāṇasī: Nāgarīpracārinī Sabhā.

Poddār, Hanunānprasād. n.d., *Dohāvalī*, Gorakhpur: Gītā Press, (40th ed. saṃvat 2056).

Śrīkāntaśaraṇ ed., 1955, *Śrīmadgosvāmī kṛta Dohāvalī: siddhānta-tilaka*, Banāras: Hindī Sāhitya Kuṭīr.